

インド留学記

その2

インドで仏に会う



東方研究会研究嘱託

保坂 俊司

しよばなから荒っぽい歓迎をうけて当惑しきりの私は「こんな筈では無かったのに」と途方にくれた。しかし取りあえず住むところを定めねばならず、生来の楽道家である私は気を取りなをして、宿探しを始めることにした。

しばらく安ホテルに居て大学の寮に入る為の運動をしたが、どうにも取り会ってくれない寮長に、随分落胆させられた。そして自分の期待に答えてくれ無い彼への、恨みが自分の心のかなで大きくなっていくのを感じた。住む所は一

月以上も定まらず、摂氏45度から50度湿度90パーセント以上の中を毎日寮長に陳情に通ったが、その道すがらインドへの不満がじよじよにてはあるが、心の中に湧き上がってくるのを感じた。勿論、大学が悪いのでもインド政府が悪いのもなんでもない。ただ自分の思いどおりにならない現実に「自分の期待に答えてくれない寮長はひどい人」等の自分勝手な不満を感じただけなのである。しかし、私はその時こそ感情で全てを判断してしまう自分勝手な不満をつのらせ

ていた。人間貧すれば鈍すとは良く云ったものである。このとき私は多くの留學生が直面する被害妄想的な、異常心理状態に陥ってしまった。戦前中国から日本に來た留學生が、国に帰ってから反日闘争の指導者として激しい抵抗をしたと聞くが、彼らの心理がその時痛い程わかった。以前の自分ならば「忘恩の徒けしからん」等と安易に考えていたが、しかし現に自分が困難に直面してみると、そんな呑気なことは云っていられない。知る人もないインドで、フラストレーションは高まり、インドへの不満は日々たかまつた。其の時私は留學生の陥り易い、こうした不満と焦燥に常に脅かされていた。冷静になつて考えれば、この寮長は悪い人ではないのである。勿論インド政府が悪いなんてことは、全く論外のことである。しかし、其の時は自分の心のなかにインドに対して、複雑な感情が渦巻いて、反印感情が頭をもちあげてきて

いた。

しかし、そんなある日、私は仏の様な人にめぐりあつた。風貌はちようど奈良薬師寺の薬師仏そのものの穏やかさ、まさに大人の風格ある韓国人留學生金龍換さんである。彼は日本に留学し立派な成果を挙げ「更にインドで釈尊の心に触れるために」と、わざわざ留学してきた仏教学者であつた。金さんは私の苦境をみて「良かったら暫く同居しましょう」と云つてくださり、私は本当にうれしかつた。まさに地獄で仏に会うとはこう云う事であろうと実感した。もつとも金さんもゲストハウス住まいであつたから、長くは居候をきめこむことは出来なかつた。しかし、すっかり金さんに出会つて気分を良くした私は「多少の強引さはやむをえない」と判断し、強硬手段で大学の寮の一室を確保することにした。其の時には、早くもインドへ來てからほぼ二月が経過していた。私は今度は恩返

しとばかり金さんが部屋を確保するまで共同生活をすることにした。ようやく落ち着いた生活が始まった。

インド人としての第一歩

衣食足りて礼節を知るの言葉どおり、生活基盤が定まるととたんに本来ののんびり屋の性格を取り戻すことができた。今まで本当に辛いと思つて通つた焼けつく道も、インドに住む実感を与えてくれる尊い物の様に感じられるのだから、我ながらあきれてしまった。現金なものである。しかし、私は此の時の体験から、外国人留学生の苦悩や不満がいかに切実なものであるかを感じ、帰国してからは留学生のお世話をしたと思つたものである。残念ながらその後実行というほどのことは何もしていないが、今もその気持ちはかわっていない。

留学生として殆どなんの後ろだても無く、未知の世界に飛び込むことはそれなりに勇氣も意

思も必要である。しかし最も大切なことはその国の文化や伝統に自分を合わせられるだけの柔軟性とそれらを的確に認識する予備知識を持つことであろう。さもないと些細な行き違いから決定的な誤解が生じることとなる。この種の寛容さが無いと常に相手と衝突し、楽しいはずの生活がその為に大なしになつてしまうことになる。またいつまでも自分の生活を変えずインドに来てまでも、日本の生活を維持しようなどという人もいたが、これも程度問題で行き過ぎると留学の意味が半減してしまう。そこで私は極力インド人学生になりきろうと決心し、彼らと同じような生活をしてみることにした。それは私がシーク教と云う現実のインドに生きている宗教をテーマとしていたから、考えついたことなのであろう。私にとっては文献を繙くこと以上に、インド人の生活や風俗に親しむことに興味の対象があつたのである。